

# 〈資料紹介〉 静嘉堂文庫所蔵『古市家由緒並茶事』

## ―近世武家社会における茶の湯の一事例として―

廣田 吉崇

### 一 三つの古市家

茶の湯の歴史において古市家といえは、室町時代後期の古市胤栄・古市澄胤が広く知られる。これとは別に、江戸時代初期の豊前小倉に古市を姓とする二つの茶家があらわれる。ひとつは肥後古流の古市家であり、もうひとつは小倉藩小笠原家茶堂の古市家である。本稿は、後者の古市家にかかる資料『古市家由緒並茶事』を紹介するとともに、古市家の由緒形成とその正統性の根拠との視点から、①資料にみえる系譜、②肥後古流との関係、③千家との関係、④近代以降の状況、の四点について整理をこころみる。

あらかじめ関係する三つの古市家についておおく。

第一に、室町時代後期の古市家である。「林間（淋汗）茶湯」<sup>註1</sup>や「珠光ノ一ノ弟子」<sup>註2</sup>の称により知られる古市胤栄<sup>註3</sup>・古市澄胤<sup>註4</sup>の兄弟は、興福寺衆徒として十五世紀後半から十六世紀初頭にかけて活躍した。

第二に、寛永二年（一六二五）に豊前小倉藩主細川忠利により召し出された古市宗庵を祖とする古市家である。この家は、萱野家および小堀家とともに、肥後古流の三家として「利休正伝の茶法」を伝えて近代にいたった<sup>註5</sup>。細川三斎の茶の湯の文脈において、しばしばとり上げられる<sup>註6</sup>。

第三に、寛永九年（一六三二）に細川家が肥後熊本へ転封となり、播磨明石から豊前小倉に内部した小笠原家に仕えた茶堂古市家である。このとき、二つの古市家は小倉の地において奇しくもすれちがう形となったのである。

本稿における検討対象である小笠原家茶堂の古市家は、四代が明石藩時代

に出仕して以来、十三代にいたるまで代々茶堂職を世襲した。このことは小笠原家の分限帳からもうかがえる<sup>註7</sup>。しかし、現在では複数の系統にわかれて伝承され<sup>註8</sup>、流派の呼称も従来から古流、古市流、小笠原古流、小笠原家古流などとさまざまである。このため全体像の把握がむづかしい状況にある。本稿では便宜上これらを古市古流と総称し、単に「古市家」と記す場合は小笠原家茶堂の古市家をさすこととする。

### 二 資料にみる古市家の系譜

（一）『古市家由緒並茶事』と先行研究の概要

本稿において紹介する資料は、公益財団法人静嘉堂・静嘉堂文庫所蔵の未翻刻資料『古市家由緒並茶事』、函架番号八〇一五一、法量縦二二・四糎、横一五・六糎、表紙をのぞき四二丁からなる。後補とみられる表紙左肩に「古市家由緒並茶事 単」と記された題簽が貼付されている。6丁才までが古市家の由緒に関する記述である。ついで、18丁才までが亭主・客に関すること、さらに、各種茶会の説明、道具のあつかい、31丁ウの途中からは台子・各種棚・長板点前の説明がある。

奥書等のみられないが、本文に傍記があることや、七代の記述に混乱がみられることなどから、写本と考えられる。また、古市家歴代の十代一決斎古市宗理までしか記されていないため、その没年の文化三年（一八〇六）以前に成立したと考えられる。これ以外に成立や書写の経緯は不明である。



に父を「和州添上郡古市城主古市播磨守清原胤栄」と明記している(註22)。

西坊家(にまぼう)に伝わった「古市氏系図」にも、裏付けとなる記述がある(註23)。西坊家は古市氏末裔を称し、円満院坊官の家系である。古市胤栄は「播磨守」、「駒崎城主 慶長十年正月七日卒」と付記され、その子に関して母は「近衛関白前久女桂光院」と書かれている(註24)。

もうひとりのキーパーソンは、丹波水上郡の黒井城にいた赤井直正である。その室は近衛前久の娘または妹であり、のちに大和国古市播磨守家へ嫁し、その女子が後陽成天皇に仕えた三位局とする記録がある(註25)。資料に「丹波国水上郡」とある背景には、赤井直正のイメージが反映されているのであろう。

#### (4) 古市家の系譜の小括

室町時代後期の古市胤栄は「丹後公」、古市澄胤は「播磨公」の仮名(けな)があった(註26)。清原胤子の父古市胤栄は「播磨守」である。本来の古市家初代である古市播磨守胤栄に対し、茶家としての歴史を語るため、時代の異なる古市播磨公澄胤と珠光との師弟関係がのちに重ね合わされたものである。しかし、この矛盾が露呈する清原胤子のことは、十一代自得斎古市宗理により削除され、後世に伝わらなかつたのではないか。

『古市家由緒』には、二代は「播磨法師子利菴(1丁ウ)としか記されていないが、美和論文が示すとおり、のちに「澄胤」へと変化している。『古市家由緒』は後世の整理の過程で失われたとみられる情報を保持しており、貴重な資料と評価できる。ただし、『古市家由緒』においても、すでに肥大化した初代像の形成がみられることは、(2)において三つの問題点を指摘したとおりである(註27)。

### 三 肥後古流との関係

肥後古流との関係において、同じ古市姓をなめる両家の間には、血縁関係も師弟関係も直接的な根拠はみられない。肥後古流の『茗理正伝』には、千利休がその茶の湯のすべてを伝えた人物として、その躰の円乗坊宗円があげられ、

さらに円乗坊宗円は躰の古市宗庵に相伝したという。この古市宗庵が古風の茶の湯をよく知る者として細川忠利により召し出されたことが肥後古流のはじまりである(註28)。同様の経緯が『綿考輯録』(安永七年(一七七八)成立)巻十にも示されているが(註29)、いずれにも古市姓の由来はのべられていない(註30)。

肥後古流の古市家はなんら主張していないにもかかわらず、近代以降に古市姓の由緒が作為されるのである。末宗広氏は、珠光の弟子の古市澄胤の門下に古市胤栄以下の古市古流の系譜を記したうえで、円乗坊宗円―古市宗庵の系譜をも併存させ、円乗坊宗円を「古市澄胤の男」とみなしている(註31)。古市古流の『古市流茶道伝書』は「紹意勝澄に弟あり。早く出家して円乗坊という。後、細川越中守忠興公に仕官して古市宗円と改名して茶道を以て勤める。…即ち熊本古流の初代也」(註32)と、古市家の傍系のように説明している。ただし、これらはいくまでも近代以降につくられた解釈であり、『古市家由緒』も美和論文も、両家の関係にはなんらふれていない。

この混乱が生じる原因のひとつとして、円乗(成)坊と、同じ読みのことばが共通していることがある。しかし、肥後古流の円乗坊は人名として用いられ、古市古流では、初代古市胤栄が隠遁した興福寺住庵の名称が「円乗坊」(『古市家由緒』1丁オ)または「円成坊」(美和論文)である(註33)。

### 四 千家との関係

肥後古流および古市古流とは、それぞれ千家との関係をみずからの正統性の根拠として主張している。しかし、その内容は対照的である。すなわち、肥後古流は千家の正統性を補完する立場を強調し、一方の古市古流は千家の正統性により補完される立場にある。

『茗理正伝』によれば、千利休は極真台子を千道安へも千少庵へも相伝しなかつたので、円乗坊宗円―古市宗庵の系譜だけがそれを伝えたこととなる(註34)。千宗旦も千利休の教えを完全にはうけついではないため、肥後古流から千宗旦へ返し相伝することにより、千家に千利休の教えが伝わる。すなわち、古市宗庵は千宗旦の要望にこたえて、利休相伝の極真の点前を伝授したのであ

る。千家流の正統性は肥後古流により補完されるのであり、この主張が肥後古流の正統性を担保している。

これに対して、古市古流の立場は大いに異なる。珠光の教えでは不十分なので、四代古市了和は「利休改正之流」を古田織部に学んだ（1丁ウ〜2丁オ参照）。そして、五代古市源右衛門（知庵）は藩に申し出て、千宗且のもとへ茶の湯の修行のために上京する。四代古市了和の兄竹中了誉（註35）が千宗且と親しいことから、古市源右衛門（知庵）は千宗且から真台子の皆伝を受け、さらに千宗且みずから剃刀をとり、千家において剃髪し、宗玄の号をあてられたのである（2丁ウ参照）。

六代無元齋古市宗也および八代一遁齋古市宗理にも千家との交流がつけられるが、七代不変軒古市宗理は、五代古市源右衛門（知庵）の例にならない、覚々齋千宗左みずから剃刀をとり、表千家において剃髪し、宗理の号をあてられた（3丁ウ参照）。

ちなみに、『古市家由緒』には記載がない十一代自得齋古市宗理について、美和論文には「名付親は官休庵千家の休翁宗守」と指摘がある（註36）。

以上のとおり、古市古流の正統性は、初代古市胤栄が珠光の教えをうけたことよりも、むしろ古市家が千家と密接な関係にあることに根拠があるといえる。皆伝、剃髪、名付などにより古市家は千家から権威を付与されてきたのである。そして、千家尊重の考え方により、

茶室は乾龍院様大和守長宣公（註37）之御花畑有之ヲ拝領ス、此御囲は当城御先主細川三斎御好にて四畳半也、……宗且に談、四畳台目に改ム、宗且ハ清風軒と号らる、（2丁ウ〜3丁オ）

古市知庵は拝領の茶室、しかも細川三斎が好んだ四畳半の茶室を、千宗且好みの四畳台目に改築し、その平面図が『古市家由緒』に記載されている（4丁ウ）（註38）。

## 五 近代以降の状況

参考のため、近代以降の古市古流の状況についてもふれておく。古市家は十三代一徹齋古市宗也のときに明治維新をむかえ、小笠原家茶堂としての地

位を失うこととなる。その後も地域における伝統ある流派として存続したのである。ただし、その活動実態が資料的にあきらかとなるのは、昭和戦後期まで待たなければならない。

小倉城趾には茶筌塚が建立されているが、これには「茶道に親しむもの古筌を全て是れに集め 供養のために焼く」小笠原古流・千家表・裏流を始め旧小倉市茶道協会有志により昭和三十五年十二月四日建立」と説明がある（註39）。小笠原古流が筆頭に位置することは、当時の小倉における古市古流の存在感を示している（註40）。また、この時期における古市古流の中心的人物として、門脇休庵があげられる（註41）。

古市古流の現行の点前を示す教本が二種類（古市流（註42）および小笠原家古流（註43））作成されているので、これらに記載された内容により、古市古流の点前の特徴および他流派との親疎関係をこころみに検討する（註44）。千家系流派と、いわゆる武家茶と称される非千家系流派との二グループに大別して比較したところ、両者の古市古流はまったく同じ特徴を示し、おおむね千家系流派の特徴と一致する。一方、肥後古流をふくむ非千家系流派とは、まったく一致がみられない。この結果からは、実技のうえでも『古市家由緒』に示される千家との親密な歴史が裏付けられ、その特徴が近代以降も維持されていると評価できるだろう。

## 六 『古市家由緒』とその射程

『古市家由緒』を軸に、小笠原家茶堂としての古市家の由緒形成とその正統性の根拠とを考察した。歴史上の人物に仮託された由緒は、すでに認められるものの、古い伝承を保持している点において、『古市家由緒』は意義深い資料である。また、室町時代後期にさかのぼるとする『言説上の由緒』にもかかわらず、江戸時代を通じて千家との密接な関係に由来する『実技上の実態』との乖離において、古市古流は注目すべき事例といえる（註45）。

こうした千家との密接な関係は、単に古市家の意思によるものではなく、藩としての方針ではないだろうか。武家の茶の湯において、二代將軍徳川秀

忠の時代には、古田織部の茶風が絶対的な影響力を有していた。しかし、寛永九年（一六三二）の徳川秀忠没後に千家もふたたび台頭する機会を得ることとなる<sup>註46</sup>。紀伊徳川頼宣への表千家の出仕および加賀小松前田利常への裏千家の出仕はともに寛永十九年（一六四二）である。こうした事実をふまえるならば、古田織部に学んだ四代古市了和が出仕したこと、承応三年（一六五四）<sup>註47</sup>に五代古市源右衛門（知庵）が千宗旦に教えをうけたことは、当時の武家社会の潮流を反映したものと考えられる。

近世武家社会における茶の湯のあり方を考えるうえで、『古市家由緒』は示唆に富む資料であり、今後の茶の湯研究に資するものと評価できるだろう。

〔付記一〕『古市家由緒』の閲覧等をお許しいただいた公益財団法人静嘉堂・静嘉堂文庫に対して深謝申し上げる。

〔付記二〕引用文献の名称、引用箇所における漢字表記は現行通用の字体にあため、年号等については（ ）書にして傍註をほどこした。

〔付記三〕参考資料の翻刻にあたり、神戸松蔭大学文学部の橋倫子教授に教示を得た。記して謝意を表する。

（茶の湯文化研究者）

〔註1〕『経覚私要鈔』の文明元年（一四六九）に記された二連の「林間」は、「淋汗茶湯」と評価されてきた。しかし、小林善帆氏による詳細な再検討によれば、当年に十一回あり、茶に関する記事は五例、「有在茶湯」とあるのは三例に過ぎない（小林善帆『経覚私要鈔』に見る淋汗とたて花『大乘院寺社雑事記研究論集』第五巻、和泉書院、平成十八年、一三三頁参照。従来の「林間（淋汗）茶湯」は、過大評価というべきである。

〔註2〕山上宗二記『茶書古典集成』6、淡交社、令和四年、五五、一一〇頁。

〔註3〕古市胤榮は、『経覚私要鈔』康正三年（一四五七）七月二十日条「古市春藤<sup>十九歳</sup>」から永享十一年（一四三九）生、没年は永正二年（一五〇五）（奈良県史）第十一巻、名著出版、平成五年、五一二〜五一五頁参照。

〔註4〕古市澄胤は、享徳元年（一四五二）生、永正五年（一五〇八）没とされる（国史大辞典）第十二巻、吉川弘文館、平成三年、三五七頁参照。ただし、『大乘院寺社雑事記』文明七年（一四七五）七月十九日条「澄胤<sup>廿五歳</sup>」から宝徳三年（一四五二）生か（前掲『奈良県史』第十一巻、五一三頁参照）。

〔註5〕細川護貞「三斎流と肥後の古風茶湯三家と一尾派」『日本の茶家』河原書店、昭和五

十八年、三五七〜三六一頁参照。

〔註6〕谷見氏による詳細な研究成果がある（谷見『三斎公より将監開書』と『三斎公御茶書』『野村美術館研究紀要』第一号、野村文華財団、平成四年）。

〔註7〕『小倉市誌』上編所収の「天明七年の分限帳」および「天保十二年の家中知行高控」によるならば、古市宗也（百五十石）および古市宗理（百七十石）は、明石以来の家臣とされ、「慶応二年知行帳」には茶道頭として古市宗理（百五十石）がみえる（小倉市役所、大正十年、二四九、二六三、二七二、二八二頁参照）。

〔註8〕宮下玄編『必携茶湯便利帳』官帯出版社、平成二十四年、二八〜二九頁には、小笠原家茶道古流（未得念、小笠原流、茶道古市古流（古市家）、小笠原流茶道静泰古流（月潭庵）が記載されている。なお、後註42および43参照。

〔註9〕桑田忠親『日本茶道史』にある「古市家由緒并茶事」は本資料であろう（角川書店、昭和二十九年、九五頁。河原書店、昭和三十三年、七六頁）。また、美和弥之助氏による紹介および引用がある（清風軒茶会記『記録』第十二冊、小倉郷土会、昭和四十年、五六頁参照。「清風軒茶会記（2）」『記録』第十二冊、昭和四十二年、四六〜四七頁参照）。近世においては井伊直弼が古市家の系譜を記している（史料井伊直弼の茶の湯（下）、彦根城博物館、平成十九年、七九〜八〇頁参照）。

〔註10〕『小倉市誌』下編、小倉市役所、大正十年、四一〇〜四一四頁参照。

〔註11〕山崎有信『豊前人物志』昭和十四年、一〇六〜一〇七、一一一頁参照（覆刻、国書刊行会、昭和五十六年）。井上円蔵『豊前上野焼研究』窯芸美術陶磁文化研究所、昭和十八年、一五〜一九頁参照（覆刻、国書刊行会、昭和五十六年）。

〔註12〕美和弥之助「古市文書について」『記録』第二冊、小倉郷土会、昭和二十九年、七四頁参照。

〔註13〕註記したもの以外にも、以下のものがある。「茶会記に現れた上野焼」窯芸美術陶磁文化研究所、昭和十七年（覆刻、国書刊行会、昭和五十六年）。「休翁と自得齋」『武者の小路』昭和十七年八月号、武者の小路社。「宗旦と豊前小倉」『武者の小路』昭和十七年十一月・十二月合併号、武者の小路社。「半宝庵文政茶事」『武者の小路』昭和十八年二月号。「千ノ宗旦と豊前小倉」『記録』第四冊、小倉郷土会、昭和三十一年。「清風軒茶会記（3）」『清風軒茶会記（六）』『記録』第十三冊〜第十六号、昭和四十三年〜昭和四十八年。「徳川90大名家の茶道」小倉藩（小笠原家）『歴史読本』臨時増刊「特集武家茶道の系譜」新人物往来社、昭和五十三年。

〔註14〕美和弥之助「古市氏の過去帳」『師と友』第二十三巻第六号、全国師友協会、昭和四十六年、三九〜四三頁参照。

〔註15〕美和弥之助、前掲「古市氏の過去帳」四一頁。

〔註16〕美和弥之助、前掲「古市氏の過去帳」三九頁。

〔註17〕熱田公「古市澄胤の登場」『中世日本の歴史像』創元社、昭和五十三年、二五五頁。

〔註18〕『角川茶道大事典』本編、角川書店、平成二年、六三六頁参照。

〔註19〕『後陽成天皇実録』第二巻、ゆまに書房、平成十七年、八一八〜八二二頁。

〔註20〕前掲『後陽成天皇実録』第二巻、八一九頁参照。なお、宇野日出生「足利義昭の子孫」久野雅司「足利義昭」戎光祥出版、平成二十七年、三三九〜三四〇頁参照。

(註22) 前掲『後陽成天皇実録』第二巻、八一八頁参照。

(註23) 西坊義信『古市氏系図』平成二十四年、同『古市氏系図』続、平成二十七年、京都府立京都学・歴史館所蔵参照。同系図によれば、古市澄胤は古市胤栄の二代前であり、古市胤仙とは直接の血縁はない。なお、両書とも「はじめに」において静嘉堂文庫所蔵『古市家由緒』の存在を記している。

(註24) 西坊家「古市氏系図」にあらわれる古市胤栄の曾孫は加賀藩に仕えるが、古市胤重・古市務本(三三六三三石)の二代で断絶する(『加賀藩史稿』巻之十三列伝十一、尊経閣、明治三十二年、四二丁ウ・四四丁ウ参照。侯爵前田家編輯部『加賀藩史料』第三編、石黒文吉、昭和五年(複製版、清文堂出版、昭和四十五年)、五六五・五六八、五七一頁参照。このほかにも加賀藩に仕えた古市氏があり、明治三年の「先祖由緒并一類附帳」(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵)には、古市播磨守の子孫と称する古市甚太郎および古市友作が記載されている。

(註25) 橋本政宣『近世公家社会の研究』吉川弘文館、平成十四年、三三三頁参照。橋本政宣氏もこの内容には肯定的である(同書、同頁参照)。

(註26) 永島福太郎『茶道文化論集』上巻、淡交社、昭和五十七年、三三九頁参照。

(註27) 古市澄胤との混同がみられる古市宗超について、永島福太郎氏の指摘がある(永島福太郎、前掲書、三七六・三七七頁参照。なお、前掲『角川茶道大事典』本編、一二〇一頁参照)。山科言経の『言経卿記』の天正四年(一五七六)十二月二十六日条から慶長十一年(一六〇六)十一月十四日条までの間しばしばあらわれ、公家階級の人々とも親しく交際している。医師であり、数寄者らしい記事はごくかぎられる。天正十二年(一五八四)十一月十一日条をさいごに、文禄三年(一五九四)一月二十九日条に「久在国」して「古市加賀右衛門尉入道宗超」として再びあらわれるまで空白期間があり、この間、天正十八年(一五九〇)三月十九日条に「石州僧二人来り、古市入道宗超ヨリ冷泉へ書状有之」とあるので、石見国との関係が想定される(『大日本古記録』十一『言経卿記』一〇一三、岩波書店、昭和五十八年・六十二年)。

(註28) 『茗理正伝』(宝暦七年(一七五七)成立)『新熊本市史』史料編第三巻「近世I」熊本市、平成六年、一〇〇四・一〇〇五頁参照。

(註29) 『綿考輯録』第二巻、出水神社、昭和六十三年、一〇四頁参照。

(註30) このことについては、谷見氏の指摘もある(谷見、前掲論文、三五頁参照)。なお、草間直方が文政十年(一八二七)にあらわした『茶器名物図彙』には、円乗坊の弟子古市宗安は「千少庵子」であり、千利休自死後、細川三斎に召し出された際に、「珠光時代茶二名高き故ヲ以て古市の姓をあたえられた」という(『茶器名物図彙』(上)文彩社、昭和五十一年、一一八頁)。

(註31) 末宗広『茶人系譜(新編)』河原書店、昭和五十二年、一九、一八六頁参照。

(註32) 門脇休庵『古市流茶道伝書』昭和五十六年、第二章第二編、北九州市立中央図書館所蔵。

(註33) 当時興福寺に「円乗(成坊)」が存在したかは不明だが、宝永五年(一七〇八)には「円成院」が存在した(『奈良市史』寺社編、吉川弘文館、昭和六十年、一九九頁参照)。

(註34) 前掲『新熊本市史』史料編第三巻、一〇〇五頁参照。

(註35) 美和論文には、四代古市了和を「竹中了誉の三男で、紹意の甥養子」(美和弥之助、前

掲「古市氏の過去帳」三九頁)とあるので、竹中了誉は複数代つづいたと考えられる。

(註36) 美和弥之助、前掲「古市氏の過去帳」四一頁。

(註37) 小笠原長宣は小笠原忠真の子として世嗣となるが、父にさきだち死去。

(註38) 平面図からは形状が把握しづらい。四畳台目ではなく、四畳台目切か。

(註39) 小倉城公式ホームページ、<https://kokura-castle.jp/location/>。最終閲覧日令和八年一月十八日。なお、碑の裏面には「昭和三十五年十一月建立/小倉市茶道協会」とある。

(註40) 当時の古市古流の資料として、北九州市立中央図書館所蔵の大隅岩雄編『茶道古流古市自得齋を偲ぶ』思永中母姉会、昭和二十九年、小倉郷土教育研究会編『小倉郷土教育研究会記録』四月号「展示古市自得齋及古市家伝来の茶器・上野焼の名器」小倉市立図書館、昭和三十一年(いずれも謄写版印刷物)がある。また、昭和三十年五月二十二日古市自得齋を偲ぶ茶会がおこなわれた(前掲『記録』第三冊、昭和三十年、一三八頁参照)。

(註41) 門脇休庵『茶道古流への手引』昭和三十八年、三頁に「古流十五世 古市中道斎 代行/古流清風会理事長」とある(北九州市立中央図書館所蔵、出版年は同書三頁「昭和癸卯初夏」による)。この人物は、『福岡県年鑑』西日本新聞社の「名簿―茶道」によれば、昭和四十六年版、同四十八年版、同四十九年版、同五十年版において、小倉茶道協会の代表者であり、同様に昭和四十六年版、同四十八年版、同四十九年版において小笠原流古流清風会の代表者でもある。

(註42) 藤津妙古監修『茶道古市流平点前炉風編』平成五年、同『茶道古市流炭点前・基本点前編』平成六年および中村豊子『茶道古市流の歴史のあらまし』平成二年。これらは、平成二十五年十月二十七日小倉の小笠原庭園において古市流の点前を実見した際に教示を得た村上花古氏から後日寄贈をうけたものである。ここに記して感謝申し上げる。なお、その系譜は十四代勝英一貫齋宗理―十五代宗信中道斎と記されている(前掲『茶道古市流の歴史のあらまし』一五頁参照)。

(註43) 菊谷水月『茶の湯の手引き』平成十二年。令和五年十一月十三日に佐橋知子氏から教示を得、同年十二月八日に山館優子氏から寄贈をうけたものである。ここに記して感謝申し上げる。なお、その系譜について、「昭和四十七年六月、小笠原忠統公(小笠原藩主十三代)の来訪を機に古流の総裁を願い……また、小笠原忠統公は流派発展の為、平成四年十月二十日総裁兼務の家元(十六代)にご就任頂き」(同書四頁)と記されている。

(註44) 点前を分析するうえで、とくに重要と考えられる①茶碗の仕込み方、②帛紗の付け方、③釜の蓋を開ける、④柄杓を構える(合の向き)の四項目を対象とした。詳細は拙著『お点前の研究―茶の湯44流派の比較と分析』大隅書店、平成二十七年、P O D版、さいはて社、令和二年、第五章参照。

(註45) 千家から分岐した流派として宗偏流、庸軒流、普齋流、のちに江戸千家流各派などがあり、その多くは武家に仕官したものの、「古市家由緒」に示されるような千家と密接な関係にあったことは他に知られない。

(註46) 拙論「徳川秀忠期における柳宮の茶の湯―『東武実録』にもとづいて―」『茶の湯文化』第四十四号、茶の湯文化学会、令和七年、三四頁参照。

(註47) 美和弥之助、前掲「古市氏の過去帳」四〇頁参照。

# 資料 翻刻『古市家由緒並茶事』

(凡例)

- 一、漢字は、原則として現行通用の字体にあらためた。
- 二、変体仮名は平仮名とし、合字は「夕」、「メ」をそのまま用いた。
- 三、繰り返し符号は、「一」、「二」、「々」、「く」を用いた。
- 四、濁点およびルビは、原本の表記に従った。
- 五、読解の便をはかるため、読点・並列点を付した。
- 六、判読できない文字は□とした。
- 七、( )内に適宜傍注または補注を加えた。
- 八、図中の文字は「」書とし、/により改行を示した。
- 九、本文中で注記した丁数は、すべて墨付丁数とした。

(表紙)

「古市家由緒並茶事 単」

(本文)

## 古市家之事

古市播摩守胤榮ハ河内国古市郡の住人、後丹波国氷上郡にて壹万五千石を領す、將軍義昭公之御旗下二面、度々発向す、何れの時の合戦にか右之腕を打落され、自ら柳の木をとつて腕をつぎ用けれども、武士の事ならざる故三南都興福寺に隱遁す、播摩法師と号す、住菴を円乗坊と云、若き時より茶事に志あり、幸ひ称名寺に珠光と云名譽の数寄人有、是三随ひ茶之湯の交りをなす、珠光、播摩法師に一枚の茶式を書いて送る今傳之町人所持古市、播摩法師江珠光有、又、織田信長公三茂被召出、茶之湯御相手を勤、播摩所持之高麗火箸「一オ」御所望によつて指上ル、名物之道具とも数多所持す、於今に家伝する所は、スコウ焼水指・梅鉢台天下七ツ之内・真天目・割高台茶盃天下七ツ之内・南蛮耳付水指・さはり胴柄花生、武器にハ具足・刀無銘・脇指備前長船家助作・鞍・鞭、娘一人有、是又数寄に名有、初將軍義昭公の侍女にて、円満院・実相院兩門跡を産す、後又、後陽成院の官女三位の局と云、照高院宮道晃親王の御母也、

播摩法師子利菴、其子紹意也、武野紹鷗・利休同時之茶之湯の交りをなす、紹意子了和ハ古田織部正「一ウ」重勝につきて学ふ、珠光之茶の湯いまた全からざる故三、利休改正之流を汲むと也、織部正ハ附属之茶具今に伝来ス、了和ハ医道に委敷、又、蹴鞠之上手にて、

台徳院秀忠公御上洛之時、於伏見鞠

上覽有、飛鳥井・難波兩卿之御詰了和相勤、初医道ヲ以て長門之国主に仕官ス、子細有て長門国を辞し、京都に帰り、専茶道を業トス、寛永年中下条三郎兵衛一以御家老御用上京之折柄、了和三願て茶事を学ふ、一以小倉に帰り、了和之茶事三巧者を以て、

忠真公に申上る、公にも御茶事御好被遊、御師範なき折なれハ、三郎兵衛を以て了和を被召出、三百石、五拾石「二オ」田徳二面被宛行、二年程

御師範相勤、病身三付、了和甥古市源右衛門申者、茶事に志深によつて京都ハ呼返ス、無間も了和病死ス、其頃利休孫千宗且茶事を以京都に鳴

ル、故源右衛門四年之御暇を乞ひ上京ス、了和兄了誉兼二面宗且入魂成ル故三、源右衛門義如我子茶事を伝うる、真台子皆伝、於不審菴剃髮、宗

且剃刀取被致、自分着用之十徳を譲らる、名を宗玄と号せらる、宗玄婦郷の節、茶具一式宗玄に附属、何れも箱に宗且書付有、小倉着之と新知

二百石被下置、了和之家相続、篠崎木町口ハ式丁西側中之屋鋪拝領、無間も本町一丁目東側之屋敷に転之拝領、茶室は乾龍院様大和寺「二ウ」長泉公

之御花畑有之ヲ拝領ス、此御囲は当城御先主細川三斎御好にて四疊半也、又、此庭に有之所之刀掛石・石燈籠共に拝領ス、宗且に談、四疊台

目に改ム、宗且ハ清風軒と号らる、宗玄の名、宗玄寺様に着合三付、再宗且ハ宗也と改らる、宗也の子三人有、兄を玄叔と云、庖瘡目に入て片

眼と成ル、故に西一鷗を師として医道学、竹中軸雲軒玄叔と改、次男角十郎、父宗也ハ茶事伝来ス、父宗也知庵と改、角十郎剃髮して宗也と

改、上京、宗且之子一翁・江岑・仙叟、又藤村庸軒高直等に茶事を談ス、三男を藤八と云、長真公御家中近藤甚左衛門養子と成、則甚左衛門と改

三十一才時也、正徳五乙未「三オ」

忠雄公御参観之上、御囃被成新知百石被下置、兄宗也同役に被仰付候、

甚左衛門藤八と申、時以上六才元祿九年也、上京、仙叟・常叟・六閑齋・

覚々齋其外出会、茶事を談ス、仍而茶事に功者故に、御茶道二被召出ル、

江戸出立、京都に立寄、於不審庵剃髮、宗玄之例にて、覚々齋宗左剃刀

取被致、宗理卜号せらる、小倉に帰着、宗理茶室ハ四畳半にして仙叟宗

室好也、覚々齋より茶室之額不変軒之三字を得る、兄宗也子細有て築城

宗武村に蟄居被仰付、宗理に父宗也家統被仰付候、無間も五十石之御加

増被下置候、其子宗理通齋実は辻忠左衛門則定次男也、父不変宗也より

皆伝、度々上京、如心齋初メ(3ウ)名譽之茶人二出会ス、寛保(二七四三)三癸亥閏

四月七日、  
忠遙公清風軒に被為入、

忠真公二拜領之三齋所持刀掛石・石燈籠 御覽被成、是二ツ之名物二対

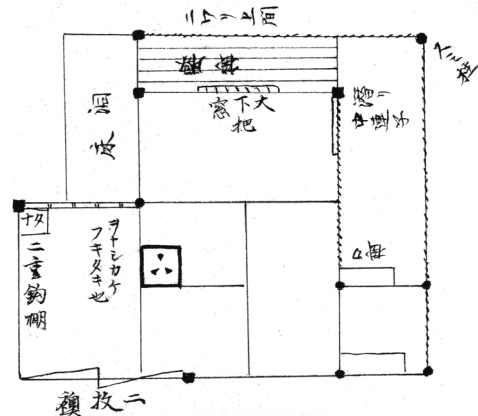
して三齋所持六角之手水鉢拝領、於今有之、

一、清風軒之額宗旦之書

清風掃明月明月払清風一行物所持、

一、清風軒之御記一軸有、忠雄公御筆也、(4才)

清風軒之図



四方柱・ク、リ戸・床柱、皆三齋御囲  
之材木也、

【スミ柱 潜り 中連子 刀掛 二ワ

リ上間 腰掛 大下窓 枳 洞床 ヲ

トシカケ／フキヌキ也 タナ 二重鉤(鈎)

棚 二枚襖(二) (4ウ)

一、清風軒 忠遙公御筆

一、石燈籠ハ佐久間不干齋所持、細川三齋翁に送られ候所なり、

一、刀掛石、三齋公御秘藏之石

一、手水鉢六角、弘治二年丙辰十二月卜有、松永弾正久秀より細川兵部大輔

藤孝公二送る所、小倉城四季之間三三齋公御数寄屋有、忠真公御数寄屋

となる、御庭三有之、

一、待合聴濤居之額ハ、広寿開山即非和尚書也、即非和尚ハ長崎ハ小倉に被

参候而、東御樹木二居被申候時、

忠真公御入、御法話之跡にて、宗也知庵被仰付、台子二茶之湯有、其時

即非和尚殊外感心三、日本之茶礼(5才)嚴重三、珠光・紹鷗・利休之

茶道、禅法二ひとしきと深く被感、其坐にて聴濤居之三字筆を染らる、

一通齋の子的々齋宗也、実ハ大堀彦右衛門次男也、祖父不変宗也より皆

伝、其子宗理一決齋と号ス、

一、無元宗也之茶室ハ仙叟好三畳台目也、額ハ仙叟之書、無元齋之三字也、

見了と云名ハ大徳寺鏡岩宗晃号元せらる、見了之偈有、

一、不変軒茶室ハ仙叟宗室好四畳半、額は覚々齋宗左之書、不変軒之三字也、

一、一通齋茶室ハ今日庵写、額ハ如心齋宗左之書也、

右之通、元祖宗也、宗旦翁に茶事修行すといへとも、(5ウ)宗旦翁の深

意にて、古市家播摩法師伝来の茶道を本とすへしと也、利休以前之茶道

未足ざる所を、宗旦翁より伝来有之、

亭主方心得之事

一、客我と同輩ならハ、何日の何時に御茶可進候、相客は誰々二可仕候と書

状に認メ遣してよし、又、相客は連状にても不苦候事、

一、敬客に候ハ、何日之何時に御茶進上申度候、御相客は誰に可仕候哉と

参て伺ふへし、

一、客之内に所持之道具、同様之道具亭主所持ならば、(6才)其道具出すへ

からず、併、一方名物か拝領の道具に候へハ不苦候、

一、客来ル半時前程に露地内外に水をひたと打べし、樹石、石燈籠、垣二いた

るまで、うるはしくすへし、露地の戸も水を打へし、暑中ハ水ひたと打、

寒天ハ客来るとき飛石三分一かわきたる程よし、猶時々見合肝要なり、

一、手水鉢に清水を溢る、程入へし、柄杓を能水にてしめし、前石より手形に置へし、手水鉢肩広きには合を横様に置、肩狭きには合をうつむけに置也、夜中又風雨の天気には蓋をすへし、極（6ウ）寒天には手水鉢脇の湯桶石にぬる湯を入たる湯桶を置へし、

一、腰掛には円坐近來は多葉（粉）盆を出す、極寒には手形盆を出へし

一、客を迎ひに出る事、先に坐敷に入、炉中に薫物をくへ、則潜り口より出、露地方々気を付け、中く、りに候ハ、敷居に手をかけて一札すへし、扱、戸を立よ七置帰る也、敬客ならは潜り之外へ出一札すへし、帰り様も露地中万々気を付、坐敷のく、りに入、草履さわりなき処に立置、潜戸指三ツふ七程明け置也、勝手の障子はいつもひしと立へし、一、客座入、とくと着坐し、暫く間有て勝手の障子をあげ、一札有へし、但、坐敷へ出る時、足音もなく勝手口まで来り（7オ）障子をそろくと明候ハあしく、程よくすへし、露地に迎ひ出る時も如斯障子を明る前に羽簾にて二三、座敷へ出て、来儀忝由を申へし、客よりも相応の挨拶有へし、色々咄なと致すなり、

年頭・口切、初対面の客には此処にて熨斗を出すへし、熨斗をたはねたるを杉の足打にのせ持出、上客に出す也、又、切熨斗も出る也、台目ゆき、炉中を伺見て勝手入、炭を致し候也、

#### 炭手前之事

一、炭は釜の大小ニ応して多少すへし、初の炭は風情に（7ウ）なすますとも、能釜の沸るよふにすへしと宗且は被申哉、炭を置にさのニ按するは悪し、さらくと置度ものなり、炭の仕形ハ色々有へし、

一、巧者の人の炭置を見て知るへし、第一嫌ふは、利休の哥ニ、

炭置かは五徳はさむな十文字縁もきらすな釣合をしれ炭の寸法荒増は別記す、

#### 水次の事

一、片口真ぬりも有、木地もあり、大中小有之、木地は水ニてよくしたし、ぬくひて、ぬれ色を用る也、蓋の上にふきんを畳ミ置へし、尤、なましほりにして置也、左手にて片口の手を（8オ）持、底に指少しかゝるや

うに持へし、右の手は口の下の所にあて、持出、左脇ニ置、布巾を右手にて取、片口の口に置、両手ニて片口のふたの縁にもたせ置、布巾を口の下にあて、水をつく也、扱、つき仕廻、下ニ置、布巾にて口の露を拭ひ、口にかけて置、釜の蓋をしめ、片口の蓋をあをむけながら、片口の上ニのせ置、布巾にて釜の肩より羽落迄を向今前と拭ひ、又、ふきんを折かへして左手にて左の肩より羽落までを向今前ニ拭ひ、布巾を片口の蓋に置、勝手へ取入る也、又、塗片口には蓋置を持添出るなり、

一、膳出す事、客の勝劣によらず、亭主配膳すへし、勝手につくは、障子を明ケ、上客より段々と膳をすゆる也、（8ウ）末座まで膳を出し、龜末には候得共可参と申也、扱、平皿指物なり引物を出す、持出、膳の右の方ニ置へし、一々勝手の障子ハ立つへし、初椀済候ハ、飯次盆にのせながら持出、先勝手口に坐し、右手にて杓子を持たながら、両手にて蓋を明、其儘杓子を鉢の内へ入、客前ニ持出、杓子を客の取よき様ニ飯共をまわし、膳の右脇に置、其盆にて汁かゆる也、先上客の汁をかへ、入て次の客の汁をかへ、上客しる持出、三ノ客の汁をかへ、二ノ客の汁を持出る也、引つゝ、ゐて焼もの持出る、重引又鉢にてもよし、其後銚子・盃持出、盃台ながら上客にわたす、一段亭主酌をして、銚子引入、酒を改、持出、末坐の客ニ宜御進め可被下度頼、勝手入、飯次又持出、汁かへ候事、如初、（9オ）しかし、此度は一客ツ、汁をかへてよし、吸物持出る事、平皿出候如し、末座に吸ものを出、銚子を引入、酒改持出へし、飯十分に候故、最早湯出し候様ニとあらハ、一通ハ進メ候共、強てす、め候事悪し、年頭・口切、初対面の客杯には此処にて盃事致すへし、盃事ハ近來の事也、むかしはなき事と聞へ候、盃事の時ハ片木肴出ス也、扱、湯盆ニ湯桶ニこかし壺を置、持出、湯の子すくひを湯桶入、客の取能様ニ向、上客右の方ニ置、脇を此盆ニのせ、取入へし、障子しめへし、食事仕廻候ハ、湯盆持出、障子を明、湯は何分やと伺ひ、相済候ハ、湯桶ニこかし壺盆ニのせ取入也、扱、膳を順々に取入、菓子を出す、縁高・食籠杯入、かさねて上客の前ニ置、勝手入、（9ウ）障子しめる也、

食の湯出ス時に腰掛ニ円坐・多葉粉盆出し置へし、暑之時分は此時

庭ニ水打へし、引物・飯次のあきたるは、末座の脇に有之故、長く置てハあし、間合ニ取入へし、

客中立

一、客坐を立れ候ハ、掛ものをまき、座中掃除すへし、花を生、水さし・茶入置合すへし、水さしは四季ともに水にてぬらし可申也、道具置合相濟、案内致候事、本の如し、

一、高貴の人には初の如し、主人案内に出る也、同輩の人に「(10才)候ハ、鳴物を打、案内すへし、潜の戸ハ指三ツブセほと明懸ケ置もの也、鳴ものは鉦・喚鐘也、数は路地の遠近による也、喚鐘は同音同間に打也、鉦は三声は同音同間也、五声ハ大中小々中と打也、

客座入

一、客座着候ハ、主人茶盃持、勝手口障子の際にてつくはひ、障子を明、茶を点る事、

一、茶入・茶杓并袋所望有、客見物の間ハ勝手の障子を立置可申也、道具見終らは、障子を明出で、挨拶有て、道具引入へし、主人出、挨拶有て、四方山の咄致ス也、「(10ウ)

当時は此所にて多葉粉盆出すへし、

釜沸落候ハ、後炭をかる也、後の炭ハいかにもかるく趣有様に致すへし、釜沸立候間ハ、主人出、又緩々咄致す也、釜沸立候ハ、薄茶可点よしを申て勝手に入、干菓子を上客の前ニ出し、水指持出、薄茶点候事、一、薄茶仕廻、主人出、又咄共致す也、客暇を請、何角挨拶有へし、夫濟て亭主勝手の障子を立入、客坐を立、外露地の腰かけに参候時分を考へ、送りに出へし、前ニ迎ひか出たる所まで送り出、一礼すへし、

客方心得之事「(11才)

一、茶主より何幾日に御茶進度との状来る時、必其節可参と返状遣すへし、相客誰々ニ候由、得御意候、何様以参御礼可申と可有也、

互ひに礼なしとの時ハ、其意に任すへし、敬客ならは一ト通り奉畏由申、直ニ罷越礼ニ参るへし、

一、相客申合同道致行たるハよし、然共相客の住宅隔、同道不相来時は、何方にて待合すへしと約束するか、又ハ直ニ茶亭へ行か、能々申合すへし、茶主むかひに出ハ、一礼すへし、主、戸を立かけ入る也、其時其儘入へからず、主人勝手まで入たると思ふ時、客中へ前後の時宜有て、上客より次第に入也、「(11ウ)

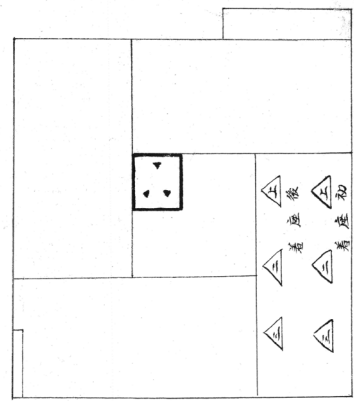
一、露地にて相客中何程心安くとも耳雑談すへからず、高話高笑悪し、

露地入雁行の如しとて、不遠不近打連入へし、上客手水つかひ、刀掛に刀かけ候時、二ノ客手水鉢つかひ、上客座入いたし候ハ、二ノ客刀かけ候、三ノ客手水つかひ候、ケ様に有へし、

一、手水鉢前石につくはひ、手ぬくひを出して腰ニはさみ、手水遣ふへし、一柄杓て手洗ひ、口すゞぎ、柄杓の糸を流し、本の如く置へし、

一、刀掛に刀かけ候事、二重ならハ上ニ刀下ニ脇指たるへし、貴人ニは相伴の人ハ、上客大小上ニかけ、相伴ハ下ニ置へし、端ニ「(12才)紙をしき、片脇の壁ニ立掛置へし也、く、りの戸を静に明ケ、先内の様子を気ヲ付て見、畳に両手をつき、片ひざあげ、すへり入さまに又片膝をいれ、あかり、口の方へねちかへり、ぬひたるせつたを潜り下の壁ニ立掛る也、客数多有時ハかさね立掛てもよし、上客床前に行、床前卷尺程隔坐し、扇子をぬき、両手をつき、掛ものを見る、夫にても見へさる時は床ふち迄寄り、或は立て見てよし、其文句高く読へからず、扱、炬前に廻り、釜を見、棚の置合せをも見るへし、上客置合せを見る内に、次の客は床前に行、掛ものを見る内に、上客先坐の中程に居るへし、上客着坐を見て、次の客炉前に行、其間に三ノ客床前に行、又其内に次の客二ノ坐に、「(12ウ)三ノ客炉前に行、其時上客本坐に詰る、次の客同く続寄、其時三ノ客末坐に着ス、是にて坐中二人立事なし、

一、亭主出来義忝き由可申、尤、其答へ致し、其後四方山の咄したるへし、庭の模様、石燈籠・手水鉢、掃除、坐敷の住居、掛物杯の挨拶可致なり、「(13才)



【初座着 上 二 三 後座着 上 二 三】

客多き時は床前の畳にかゝり坐付てもよし、貴人は床の前の畳に坐付有るへし、(13ウ)

一、主人炭を致候時、釜をあげ、炬ふち何角はき、火箸取候節、上客より次客にあいさつして、一同に炬辺にすり寄り、先下火を見るなり、又、薫ものをくへ、香合の蓋をする時、香合拝見致度と望むへし、炭置仕廻、釜の湯を見、ほふるくを持候て、勝手にいらんとする時、暫く御控へ被下候へ、炭・釜ともに得と見申度と望へし、炭仕舞、坐中をはき候時、かき畳に香合返す也、

一、炭を仕廻、膳を出し、主必膳をすゆる者也、其時客少しすり出、膳を中にて請取、戴き、下置、末客迄膳をすへならべ候ハ、上客より御給仕は御無用に被成候、通ひハ必ず御出しあれと申へし、(14オ)

一、汁を初として、鉢か重箱何にても、皆不残様喰へし、我嫌ひ之物有之候ハ、少しも箸を不付、其儘置へし、

一、酒出スに、必ず持出、酌を致し候、半と申時、御酌は御無用、是へ被下候へと申へし、初献は酌可致と申さは、其意に任せてよし、

一、すへて入物の明たるは、末坐の役として勝手口の方へ寄セ置へし、

一、懐石済ミ、亭主膳を取出たる時、客我膳を取て、主へ渡すなり、

一、菓子喰仕廻、入ものを勝手口の脇に置、上客次の客にあいさつして炬前に廻り、火合のうつりを見、又、床(14ウ)前に行、名残りに掛軸を見る、くゝりを明ケ出へし、

一、腰掛の事、円坐敷并へて腰掛る也、（貴）老人御相伴の時は腰掛の下につくは

い居る也、是非腰掛へと被仰候時、下の石に円坐ヲ敷腰掛居り、又ハ腰掛の上へあかりかしこまり居ともよし、

一、鉦・喚鐘にて案内のしらセ有之候ハ、腰掛をはづし、つくはいて聞へし、後坐入之作法初の如し、

一、主人茶点候事、茶点出し候時、上客少しすり出、両手にて茶盃を取、二ノ客の前ニ置、右手にて帛をとり、茶盃の下にならへ置、相客へ先まいるへきよし申、二ノ客上客にまゐるへしとあいさつす、其時上客茶盃を取、我右(15オ)の方に置、帛を取、左の手にのせ、茶盃を取、呑口を我前にして、帛の上のせ、右の手を茶盃の脇へそへ、戴き呑へし（戴き候時、頭をさへ、茶盃をあまりにあけ候へ、からす、二口半ほどに呑へし、）一口たへて候ハ、茶盃をはなし、一口たへてハ茶盃をはなし、呑へし、左なき時は、息茶盃の中へ入るゆへ也、たへ仕舞、其儘茶盃をひく、さけ、右之大指にて呑口をよくぬくひ、茶盃次の客の前ニ置、帛をも茶盃の下に并へ置、呑よふ上客の如し（但、冬内は茶ひゆる故、帛、末坐敷なから手渡しにすへきなり、）茶たへ仕廻、茶盃と帛と共に上客の前ニ返す、上客茶盃をとくと一覽すへし、両ひちを畳に付て茶盃を見る也、余り茶盃を高く上て見る時はあやうし、帛をも見る也、此帛ハ名切レなど有物故、(15ウ)主人に尋問てよし、末坐茶盃・帛見終りて、又上客に返す、上客先帛を返す、主人釜の蓋を取、或は水指のふたなど取り、仕舞候時、茶盃を返す也（茶わんの前後よ、并へ返すへし、口伝、）

一、上客茶をたへ仕舞、二・三ノ客茶をたへ候頃、主人江茶師・茶銘などを可尋也、此所にて花の挨拶、又花生など可尋也、当代他流にてハ濃茶のたて始め、柄杓を引候時、花のあいさつ有也、是も心得可置也、

一、茶盃之由緒尋候は、茶のミ仕舞、茶盃を戻し、主茶のひきを聞、色をも見て、下置候、客分結構の御茶忝とあいさつし、扱、此時に茶盃の事尋問へし、又、茶盃(16オ)見候時、主の間あらハ直尋問てもよし、時宜次第なり、水さしなども茶盃尋候時と同様と心得へし、亭主濃茶仕廻、水指の蓋を致し候時、茶入・茶杓・袋共に拝見申度と望むへし、右三品カキ畳に出候ハ、上客すり出、右手にて茶入を取、二三之客の前当りに置、茶杓・袋と順にならへ置、先夫御覽有へきやと辞退す、二三之客分先上客とあらは、茶入を取、我右之方ニ置、茶杓・袋と一所

取、同ならへ置、兩臂を疊に付、茶入見るなり、茶杓・袋は高くあけて見てよし、次々同し、末座より上客に三品返す、扱、亭主道具を勝手に引入、出坐ならば三品カキ置に返す也、出坐無ク共道具(16ウ)不殘取入濟候ハ、返してよし、主三品取入り候時、茶入は如何様ヤ、茶杓・袋も尋ね問へし、扱、結構成御道具拜見忝と一礼を述べし、

当代は此所にて多葉粉盆出る、上客よりは必御主人(五)も多葉粉盆御持候へ、緩々可話と可申也、

主人被出候(四)、手前御苦勞之よし挨拶すへし、此所にて緩々話有之へし、すへて料理之善悪・好物嫌ひ物・道具之批判、他所の事といへとも、はなしすへからず、

一、炭落候故、炭かへ候よしあらは、御勝手に可申也、此度ハ胴炭置候所より、上客初一同に炬前(三)す、み、炭置を見てよし、(17オ)

一、釜沸立候へは、薄茶立る也、一順は茶点出すもの也、二服とは点させぬよふにすへし、語候てす、め候ハ、大服に被下候へ寄合給可申と強て望むへし、水さしの蓋める時、薄茶入拜見いたし度と所望して見るへし、薄茶仕舞、暫話して暇を乞ふへし、主人勝手に入候ハ、名残に釜を見、花・々入をも見て、退座すへし、露地の中程にて見合、主人送り被出候を待、更一礼すへし、

一、翌日ハ必礼(三)参るへし、貴人客ならば、主人よりも翌日礼に参るへき也、主客の位を心得へし、

一、露地に石を居、砂を入、是を砂雪隠といふ、古は是計を用といへとも、当代はこれをかさり雪隠と号し候也、(17ウ)外露地(三)下腹雪隠とて、かめを居、ふみ板を敷、是に大小便調ふ也、当代之は侘て砂雪隠(三)砂もなく、わらをあえて入有之、是には小便所と心得べし、(18オ)  
(空白半丁)(18ウ)

### 風炉之事

一、風炉に揚る時節、寒暖によるといへとも、四月朔日と心得へし、利休居士正月三日長閑成とき、風炉に揚らる、事有といへとも、利休居士ハ格

別也、其意尤深かるへし、凡人の汲知る事にあらず、

一、風炉之事、昔はからかね風る専に用といへとも、火氣を含み、暑一入増る連、利休土風呂を被用候、土風炉は南良を第一とす、京に宗善、江戸に天下一惣四郎と言有、形は釜の形に合せて作るなり、侘ハ取合風るを用、釜の恰好と風呂との取合は茶人の眼なり、(19オ)

一、灰の仕様、色々有り、土風炉には山を立るなり、山は三ツ五ツ七ツ、風呂によりて用ゆ、前ハ、

月形灰はミぢんを用、いかにもろくす、しく灰をすへし、土器は火氣おさへの為なれば、初は小を用、極暑は大を用、又小をめとり羽(三)違へ用る事もあり、

一、大風炉に小板、小風呂(三)大板を用へき、目超し免あり、板目のあらき方を前(三)すへし、

一、極暑は膳過て炭を直す也、又、懷石中、湯を出して炭直置も致すなれと、くたくしきゆへ、懷石出し、膳を引き、炭を直(三)いたし、炭仕舞、口取出し(19ウ)候方可然なり、

一、土風炉にてハ、客座着挨拶済、風炉前行、帛をたたみ、右の手(三)持、左手は畳につきをり候、風炉の右の方の肩を向より前(三)ぬくひ、胴を向より前と二順程もぬくひ、風炉の大小より見合へし、帛畳かへ、左手にて、右の手を畳(三)つく、左ノ肩向より前(三)ぬくひ、胴を二順ほどぬくひ、又右手(三)帛を取、火口を左より右とふき、ふきかへしをいたし候事、猶口伝、膳腕に露を打べし、

一、風炉初座入之時ハ、火おとろへ、懷石済にはかすかに下火有る方よし、(20オ)

一、炭いたし候事、胴炭大きく候ハ、向ふ(三)置へし、細くは前よし、とかく前塞かりてハ火おこらぬものなり、炬よりも炭を五分短(三)切へし、

一、前灰を初めの炭(三)は、二杓子も三杓子も取りてよし、風炉の大小(三)もよるへし、炭仕舞で膳なり、酌子目残見ゆるやうにするものなり、後の炭いたす時は前灰取るへからず、此時は惣体(三)にぬれ灰をまく也、猶口伝、

一、風炉は小釜(三)にて、炬よりもおそく炭をしかけ候ゆへ、湯へり申さぬ故、

初水をさし申さぬものなり、茶をとろへたる時節故、湯もあまりねれ過たるはあしく候、(20ウ)口伝、客中立、案内には鉦・鐘打事、炉の時に同じ、此間、置合花入候事如常、

一、夏は花を広口之花入、又舟かけ花入<sup>ニ</sup>ても、花の取合次第、別<sup>面</sup>うるわしく涼しく生候事、肝要なり、

一、すたれ<sup>ニ</sup>てくらき時は、窓の風の来る方簾取りてもよし、見合肝要也、

一、濃茶手前之事、

一、茶盃は極暑<sup>ニ</sup>はいかにも平目なるを用ひ、水打そ、き用へし、

一、茶点候時、四五月より茶の香おとろへ候もの故、中水は是非一杓指候へし、(21オ)

一、極暑<sup>ニ</sup>至りてハ、平水指杯用てよし、す、しく見ゆるものなり、

一、庭<sup>ニ</sup>も初中後水打そ、ぐべし、客来前一度、中立之時一度、客帰り之時一度水打へし、坐敷の簾<sup>ニ</sup>も水打へし、又、露地の戸などにも水打かけ候べし、

一、濃茶済、後の炭を致し、薄茶点候事、炉の時と同じ、

一、兎角風炉は、後の炭、薄茶杯はさらく<sup>と</sup>いたし候方よし、

客方(21ウ)

一、風炉<sup>ニ</sup>て御茶可申とある時は、暑き時といへとも足袋を用へし、あふら汗出、畳ざわりあしき故也、衣類ハほのかに包<sup>包力</sup>ひを用へきなり、

一、座敷<sup>ニ</sup>入、着座するまで炉と同じ、主人炭致し候時、灰并<sup>ニ</sup>炭を所望して見るへし、此時釜をもとくと見るなり、

一、懐石たべ様かわる事なし、

一、其前替る事なし、

飯後之茶之事<sup>菓子之茶湯と言はあまりなり</sup>

一、朝飯後・夕飯後之ものなり、

一、床之内<sup>ニ</sup>掛ものをかけ、花をも入たるかよし、(22オ)

一、客来る前<sup>ニ</sup>炭をいたし置、いかにも客来候時は釜沸候程<sup>ニ</sup>いたし置もの也、

一、客待合<sup>ニ</sup>来らハ、無間案内すべし、客座入、挨拶済、籠菓子を進すべしとて、菓子を出すなり、客くわし給仕舞、手水に立也、主人よりハ御手

水御仕舞被成次第、直<sup>ニ</sup>御座入被下候へと、挨拶申へし、客手水<sup>ニ</sup>立候ハ、此間に水指・茶入置合致てよし、若、客少く候ハ、客坐入いたし、水さしより運び手前<sup>ニ</sup>てよし、茶仕舞候て、釜も沸落候ハ、後の炭いたし候べし、客は此時香合を所望してよし、炭仕舞、暫く咄し、釜沸立候ハ、薄茶点候事、其前替る事(22ウ)なし、

一、客酒好き<sup>ニ</sup>て、酒杯す、め度候ハ、茶仕舞、炭かへて、此間<sup>ニ</sup>吸もの・酒肴出してよし、

一、菓子は椀盛よし、汁子之にえのもちなどよし、煮染を木皿杯<sup>ニ</sup>入出すべし、もりかへを出すべし、略しては縁高に餅菓子<sup>ニ</sup>にしめを添出事もあり、もりかへを重食籠<sup>ニ</sup>て出してよし、くろもしやうしの寸長きを二本も用ゆべし、猶伝<sup>レ</sup>口、

一、いつたい飯後の茶は佗人のいたし候事也、

一、主客ともに隙入無之時を申合、互ひ<sup>ニ</sup>緩々はなし明さんと心得て、呼びよばる、事也、万事其心得有べし、

一、庭は石灯籠・木灯ろうともすへし、燈心三すしを用、月さへたる時は、四すし五すし用ひ候へし、

一、腰かけには行燈を置べし、露地あんどと申也、尤、外露地口の石にすへ置てよし、これを道あかり、又こしかけのあかりに用ゆるなり、手燭を待合<sup>ニ</sup>出し置べし、火ともさすに置へし、是ハ客手水杯に参る時道あかりに用るなり、(23ウ)

一、紙二枚はかりをりて敷程にすべし、先四ツ折也、下皿を置、其上に土器をのせ申へし、

一、下皿にか、け木を置、燈心五すし程入へし、

一、手水鉢は蓋をすべし、風雨の時も蓋をすへし、

一、中連子窓不残かへ戸を立候也、

一、座敷之内、短檠を用、灯心七すじも入るべし、三疊・二疊にてハ加減すへし、短檠は長<sup>燈心</sup>とふしんなり、すへをとふしん一本<sup>ニ</sup>て結びてよし、口

伝有、

一、座敷之内、短檠を用、灯心七すじも入るべし、三疊・二疊にてハ加減すへし、短檠は長<sup>燈心</sup>とふしんなり、すへをとふしん一本<sup>ニ</sup>て結びてよし、口

伝有、

一、座敷之内、短檠を用、灯心七すじも入るべし、三疊・二疊にてハ加減すへし、短檠は長<sup>燈心</sup>とふしんなり、すへをとふしん一本<sup>ニ</sup>て結びてよし、口

伝有、

一、座敷之内、短檠を用、灯心七すじも入るべし、三疊・二疊にてハ加減すへし、短檠は長<sup>燈心</sup>とふしんなり、すへをとふしん一本<sup>ニ</sup>て結びてよし、口

伝有、

下の台に油次・つけきなど入へし、台の上に台一はみの紙を三四枚程かさねて折敷、其上に下皿を置、かき立木を置へし、竹槩は三疊に用、かけ灯(24オ)台は二疊・一疊半杯に用へし、

一、床には掛もの・花なし、然れとも大文字の墨跡などハ用て不苦、花は夜は用へからず、無興もの也、

一、客座入、挨拶済で、近來ハ直にたはこ盆を出ス也、掛ものなどよく見度く候ハ、手燭を乞ふてよし、

挨拶済、釜も沸候故、先御薄茶可進と申、薄茶一盃ツ、点候也、是ハ客を緩々留メ候心持なり、

但、此時は水指ハ片口水次よふのものよし、かへ茶盃を用へし、此薄茶も夜咄の大意なれとも、時宜によりて直炭をいたし、夜食出してよし、

薄茶仕舞此時は薄茶人などハ不好、後編々このみ、「(24ウ)直に炭をかへ、夜食出すへし、夜喰済、中立いたし候へし、

露地行燈は、上客手水鉢の脇石に置候なり、末座之客刀掛下三置、坐入するなり、よつて中立前三行燈あかりをよく直して、又刀掛の下に出し置、其外替る事なし、

不時之事

一、いつにても隙次第に参、一服給へ候半と兼てより約束致し、不図参事也、行時分は朝飯後・夕飯後にてもよし、客尋来らば、先待合に通し、内露

地に水を打、石鉢の水をかへ、迎ひ三出で申也、花あり、「(25オ)座中床にかかけもの有、客入て火を直してもよし、又客待合に有る内に一炭かへ

置てもよし、其外飯後の茶と同じ、濃茶挽置あらは、菓子給仕舞て手水に立候ハ、直御入候へと申へし、客坐入いたし候ハ、挽置有之間

可進と挨拶して点へし、水指・茶入かさり置ても、運ひ出してもよし、挽置の茶なれば、はらひ茶にしてもよし、其外かわる事なし、

### 跡見

一、高貴の客、珍客など有之候時など、御跡見に参り申度と「(25ウ)所望するなり、主人の方よりは客帰次第此方より案内可申と申なり、客方より

は主の宅に近き方へ参り居候よしを申入へきなり、客帰次第茶主が案内可申遣、客入らは、待合に通し置へし、内露地に水打、石鉢水を改メ、迎ひに出へし、座中は花計也、客座入、主人出、挨拶済、軽き菓子を出し手水に立せぬ、よふにすへし、残茶可進とて、水さし持出、茶点るなり、はこひ手前にすへし、茶入は其日用ひたるを帛つ、みにて用ゆ、跡見之事ゆへ、成丈ケハ

前客の時之炭にて茶点度也、但し、格別釜沸落候ハ、余り釜沸落候ゆへ、一炭かへ、残茶可進かと、客に伺ふへし、「(26オ)濃茶済、炭をかへ可申、此間に吸もの・酒ナトす、めてもよし、釜沸立候ハ、薄茶可点し、

菓子は其日不用ものを出すへし、茶は残りを有るなり、

兎角跡見又不時二客ならハ、亭客ともに功者ならては不興成行ものなり、

一、夜込の茶は別功者ならては出来ぬもの也、利休居士時分は専ら夜込之茶之湯有、別記ス、

一、口切之茶は真之第一也、壺飾茶口切之式有り、心得別記す、

一、釣瓶之水さし、水を被つて置へし、右手の人指(26ウ)ゆひを穴に入て、外之指はか、めて持、左手ヲ釣瓶の底にかけ候へし、両手のつり合三持候也、

蓋取候時は、炉は炉の方、風呂は風炉の方を取るなるも、炉の時ハ右の手人さし指にて、蓋の向を前にあしらいて出し置、其手にて前を取、我前にて向ふを前に取かへ、左手にて左の蓋の上すり込む様にしてかさね候なり、蓋いたし候時は、左手の人さし指に前ふたのむかふを前に出し置、其

手にて前に取、我前にて向ふを前にふりむけ、右手にてすら七候よふにして、蓋致候なり、客前に出し候前、水三よくしめして出すへし、「(27オ)

一、真の手桶ハ手を笠置也、真ぬり故、帛ものにてよくぬくひ出すへし、右手にて手を持、左手を底添て持出る也、蓋取候時は右手にて前を取、

我前三ふりむけ、両手にて向ふの蓋にかさね、蓋致し候時、両手にて取、我前にてふりむけ、右手にて前の所を持、蓋致し候也、

一、曲物水さし、水にてしめし、とちめ前、菊絵など有るハしめし不申候、

一、片口など侘人ハ用る事有、口を客付にいたし候、持出し候時ハ、左手にて取手の下の方を持、底少指か、りてもよし、右手を口の下に添て持出候なり、蓋取候時ハ、右の手にて蓋の前を取り、其ま、口と縁とにもたせ

置候也、「(27ウ)蓋ハ木目を横にすへし、是又よく水にてしめし候へき也、平水さしに盆蓋いたし候ハ、右の手にて前の所を持、水指の向ふに半分もたせ置也、

盆蓋ハ木地を好ミ候、木地なれハ尤水にてしめし候へし、木目横にすへし、平水さしの水を汲には、水のうこきなきよふに汲事也、

一、蓋置之事、引切ハ水を打て用へし、口切・年頭などは青竹を用へし、引切ハ紹鷗時分よりはしまる、

一、三ツ葉ハ大なる方を下にすへし、上の三ツは二ツ向ふにすへき也、

一、三ツ人形ハ是又二人向ふにすへし、帯をときたる人形「(28オ)は前にすへし、

一、五徳爪を上を用、是又一ツかわり有、是を前にすへし、

一、ホヤハ柄杓もちなから、右手にて蓋を上分取、かへして用ゆ、茶仕舞、引入候時、又本のことく蓋を致すへし、

一、一閑人飾付置候時、人形を向にして置なり、柄杓もちたら、右手にて手なりにすへかへて、ねせて持候也、

但、風炉にてハ人形を勝手の方<sup>二</sup>いたす也、

一、面桶のこほしハ、とちめを前にして置、茶点かゝり、柄杓を蓋置にかけ、扱、<sup>②</sup>とちのを客付<sup>二</sup>向申候、是ハ古ハとちめを賞翫いたし候故也、



一、鳥獸・人形類の香合ハ立、又座しおり候ハ、面を手前へ向置候、「(28ウ)客へ出候には、面を客之方<sup>二</sup>対して出す也、あをむけ<sup>二</sup>寝候ものハ頭を向にして置、客に出し候時ハ頭を前、伏し候ものハ頭を前にして置、客に出し候にハふりむけ出し候なり、

一、棗ハ大中小有、いづれも濃茶入に用る也、大ハ茶入同様に下にて緒をとき候也、中小ハ手の上にてとき候也、手の上にてときやうハ、右手<sup>二</sup>而棗をとり、左手にのせ、しかと持、右手の大指と人さし指にて<sup>か跡のゆひは、め候なり</sup>とんほうの両方を中へよせ、其ま、とき、つかりを右之方、左とのばし候、のばし様は書記しかたし、

一、大の棗は帛をた、み、蓋の上を向前と二文字<sup>二</sup>ふき、「(29オ)其ま、帛をかふせ、前分向ふにおとし乍ら横に帛をと、めて二へんまで左手の内に

て棗をまわしぬくひ候也、

中棗はかふせふきなり、

一、帛包よふは、帛の真中に茶入を置、如斯するなり、向のすみを前にかふせ、前のすみを向ふ<sup>二</sup>かふせ、両方のすみをしなよく荒ますひに結ふ也、扱、前のすみ向ふにかゝりたるを前にはさミ置也、先如斯也、ときよふは右の手にて帛包を取、我前に置、右手大指にはさみたる帛のすみに入、向ふにはね、両方の手にてむすひめ一重とき、扱、取あ

け、左手にのせ持、右手にて右の方をはね、左をはね、「(29ウ)茶入を出し候事、茶入出し候内、帛つほ<sup>二</sup>みて見よし、尚、解かたし、口伝、

一、長緒之茶入ハ大海・内海之類を用、右手<sup>二</sup>て茶入を取、左の手添乍ら我前に置、左手を茶入<sup>二</sup>かけ、右手の大指三ツ輪の向の輪の内に入、すつ

ととき、緒の輪の所を人さし指と中指とにはさみながら、両手にて茶入をよきに<sup>二</sup>ふり向、向前とつかりをつはし、上ハ手に茶入を取、左手の内<sup>二</sup>

の七候時、左手にて茶入の下より右手の人指・中指にはさみたる緒の輪の所を取、緒を左手に持ながら、茶入をのせ、茶入を出して、扱、緒ハ

輪の方を打とめ<sup>二</sup>かけ、輪を釘<sup>二</sup>かけ候なり、釘<sup>二</sup>かけ候わぬ時は、緒を左ゆひ<sup>二</sup>而も緒長短による<sup>二</sup>「(30オ)にまき、右手にて巻たる所をつまみ、ねしる

よふ<sup>二</sup>して袋の内に入候也、甚手際もの也故、書解かたし、口伝、

一、大海・内海は茶を入候時ハ、あしらいて左手にのせ、大指を肩にかけて持、蓋を取、茶を入候也、すへて茶入の口のひろきハ、茶入て後口につ

き不申故、ぬくふに及す候、

一、大海袋と云有、あしらい帛包とおなし、

一、水てきの茶入ハ口をハ客の方にむけ候也、茶を入候時に、茶杓持乍ら蓋を取て、口を前にふりむけて茶を入候也、茶を入、茶杓其ま、置、又口

を客付<sup>二</sup>直して蓋をいたし候なり、

一、釣<sup>③</sup>つきは無子細手をよこに置也、ふき候時は手の向を一「(30ウ)文字に拭ひ、又前をぬくふなり、

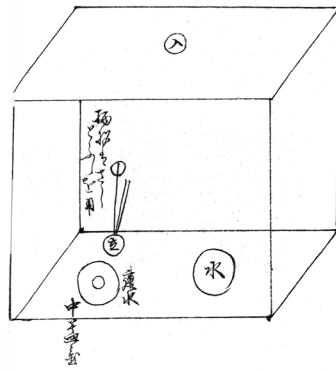
一、手瓶ハ手を左の方に置也、あしらいなし、

一、筒茶盃 <sup>ハ軸長の茶せんを用<sup>五分長し、故に、</sup>寒夜に用てよし、寒夜と</sup>

ふじと云は、湯一はる入、茶せんを三へんとふじて、其ま、軸を前にして休メ置、又一ト柄杓入、茶せん三へんとふじて、茶せんを疊に置、茶ゆを取、茶盃のよこにあて、茶盃をとうじて湯をかへす也、又茶巾にてぬくひよふハ、先底をふき、茶巾をふちに打かけ、まわしてふき、其儘茶巾ふちニかけながら下ニ置、茶巾た、み直し候也、

一、平茶盃馬盃、利杯ハ暑中にてよし、穂の長き茶(31オ)茶せん相応いたし候也、格別あさき茶盃ハ、茶を入、湯をすこし計入て、茶せんにてよくたて、又さしゆをして点てよし、夏ハ茶せんとふじて、茶巾を茶盃にあて、又茶わんとうし候も及す、夏ハ茶わんあた、まり早き故也、

台子手前之事



【入】柄杓はさし／とふしを用 水立 建水 中蓋置【(31ウ)』

一、茶盃持出、壁付に置、右手にて茶入おろし、図の所に置、茶盃を置合、右手にて火箸をぬき、左手にてあしらい、口伝、左手にとくともち、壁付ニ置（朝かへとの間、鳥頭、の分を出し置くなり）、右の手にて建水を取、左手に渡し、壁付に、左手にて蓋置取出し、右の手に渡し、我前に置、柄杓を二段にぬき、口伝、左手をあしらい、左手にとくと持、右手にて蓋置を取、点前に向申候、中仕舞候時ハ、柄杓を杓立にさし、蓋置をこほしの跡にあけ置候事、

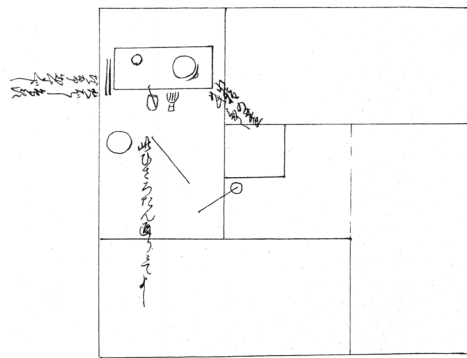
一、仕舞候事、柄杓・蓋置を持、台子二向、先蓋置を下ニ置、ひさくを右手に持、杓立にさし、蓋置をこほしの跡に置、火はしを左手にて取、右手に持、杓立にさし、建水を(32オ)下の方に引さけ、茶盃を建水の上の所に直し、茶入・茶杓・袋を客の方に出し置、建水を下ケ、茶盃をさけ、水次を持出、水さしを前にかへ出し、水を次、水指を直し、水次を取入、建水持

出る（両手にて、持出候に）、蓋置を取、建水の内に入、両手にて建水を本座に置候なり、

一、すへてひき、（さく、カ）棚に置合候時は、湯かへしたし候事、

一、水を次候時は、水さしの前に座し候事、

一、建水を持出候時は、こほしの前に坐し候事、(32ウ)

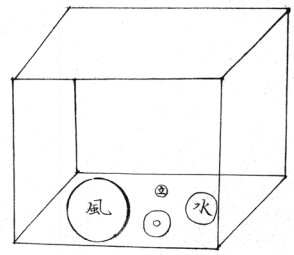


【水指の蓋／如此置く 此ひさ、ろたん 通りにてよし 火ばし鳥頭／だけ出すべし】(33オ)』

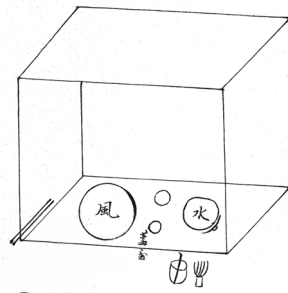
一、炭之事ハ、先釜を図の所にあけ、鑢をはつし、(釜カ)□とならへて置、少し杓立の方に向、火はしをぬき、右手に持ながら、灯の方に向、火はしを先炭斗に置、羽箒二炉をはき、火はし取、下火を直し候事、仕舞は釜に水次仕廻て再び出、炉前に坐、火移りを見て、扱、火はし右手に取、左手に渡して持、炭斗の上にて羽箒二て火ばしのうらを灰のつきたるをはき、（火はしを打かへして裏、表とも二へんはき候事）、右手に渡して持、台子の方に向、左手にてあしらい、右手にとくと持、杓立にさし候事、

一、釜に水次候時は、台子の建水の中に有蓋置を用ゆべし、(33ウ)

台子風炉之事



【水立風】(34才)

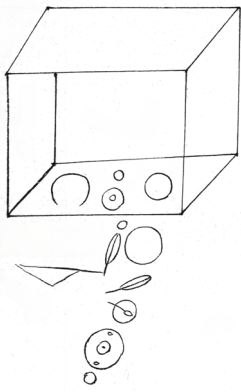


○ 【水蓋置風】

一、茶盃持出、茶入を水さしの前に図の所<sup>二</sup>置、茶盃置合候、右手にて火はしぬき、壁付に置、右手にて建水を「(34ウ)取、左手に渡し、壁付に置き、左手にて蓋置を取り、右の手に持、建水の跡座に置、挨拶して茶点か、り候事、仕舞ハ釜に水さし添、釜の蓋をして、ひさく右手に取、杓立にさし、水指の蓋をして、火はし指、建水下へさけ、茶盃かたつけ置、茶入・茶杓・袋出し候事、

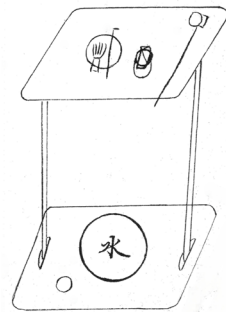
炭之事

一、炭斗ハ水指の前に置、香合・羽箆は炭斗にならへて置、座付は風炉の前也、火ばしぬきさしはかわる事なし、「(35才)



四方棚の事

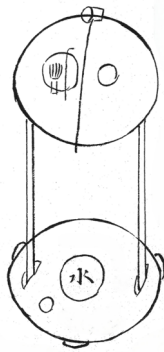
一、濃茶の時は茶入計天井に飾候故、置様替る事なし、「(35ウ)仕舞にハひさく・蓋置を棚の上に<sup>〇</sup>。如斯かさりおき候事、



【水】

平常の飾合に如斯有時は、帛を取、こしに下ケ、茶入・茶盃をおろし、水さしの前に置、蓋置を右手にて取、我前に置、ひさくを右手にてとりひさくの柄<sup>一</sup>「(36才)所をすくひ上、左手に渡し、右手にて蓋置取、ひさくにそへて点前に向候事、仕舞ハひさく・蓋置持添、棚の前に廻り、蓋置を先我前に置、柄杓を右手に持、棚図の所に置、蓋置をあげ、茶盃を棚にあげ候棚ニ飾付候茶盃ハ、茶点仕舞水さしきの時、茶巾にてぬぎ、底ハぬぐひ不申候、茶巾をよしほりて仕舞申候也、水次持出、水さしを前にか、へ出し、水をつき、水さし本坐へ直し、帛を棗の上にあけ、水次を引候、「(36ウ)一、台子はしめ茶盃かさり有之候ハ、茶巾をしほり不申候、仕舞に茶盃をかさり候時ハ、前断に書記し候通、茶盃をぬくひ、茶巾しほり切、仕廻候なり、「(36ウ)

丸棚之事丸高台とも云



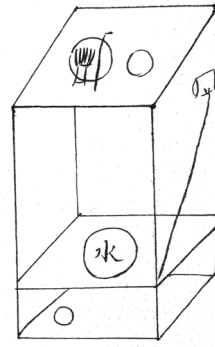
【水】

一、丸棚も濃茶之時は上<sup>二</sup>茶入計也、点様無細子<sup>(子細)</sup>、仕舞はひさく・蓋置すじかへに置合置候也、  
一、平常之時、如图飾有之候ハ、先帛を取、腰に下ケ、右手にて蓋置を取、我前に出し、茶入・茶盃をおろし、「(37才)右手にてひさくを取、左手に渡し持、右手にてふたおきを取、ひさくに持添、点前に向候也、仕舞はひさく・蓋置持添、棚前に廻り、先ひさく・蓋置を建水<sup>二</sup>かけ、休メ置、

茶入・茶盃をあけ、左手にてひさく取、右の手に渡し、ひさくうつむけにして図の所に置、蓋置を置合候なり、水次候事、如前、

水指棚之事 茶の小卓とも云

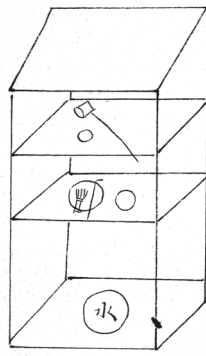
一、濃茶之時、上に茶入計、点様無細子、(子棚)平常の時如图、先蓋置を前に出し置、茶入・茶盃をおろし、右手にて柄杓を外之方より取り、左手に渡し持、蓋置持(37ウ)添、点前廻り候、



【水】

仕舞はひさく・蓋置持添、棚前に廻り、蓋置を前に置、ひさくを右手に取、外より如图、向の柱を図の所におき候なり、(38オ)

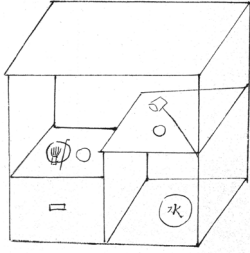
三重棚之事



【水】

一、濃茶之時、中棚に茶入を置、点様かわる事なし、平常の置合如图、茶入・茶盃おろし、蓋置を我前におろし置、ひさくとり、左手に渡し、ふたおき持添、点前廻り候なり、(38ウ)

利休袋棚



【水】(39オ)

一、炭致候時、先炭斗をおろし、持ながら坐を下り、かき畳に置、又点前棚かに廻り、右の手にて袋戸のつまみを持左手ハ袋戸の柱の所を押へる也はつし、右手にてあしらい、口口左手に持、棚とかへとの間にすらせこみながら、棚にもたせ候なり、う

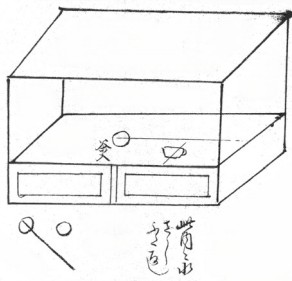
らの方、棚につき候也、灰ほうろくを出し、すこし炉の方を向、ほうろくの座に置、又棚に向、左手にて袋の戸を持、前に引出し、右手にてあしらい直にして、右手にてつまみを持、左手も戸にかけながら、はめ申候、如斯事ハ口伝ならては書解難し、

一、後座は香棚に茶入、中棚に柄杓・蓋置、点様は(39ウ)かわる事なし、水さし棚類にをして智ルべし、

一、袋の内に後座ハかへ茶盃など入置也、尤、薄茶之時の事なり、出し様は先薄茶を点、出し置、棚前二向、袋戸をあけ蓋のあしらい、ほうろくの時とおなじ、茶盃出し、前二置、戸をメ、茶盃持、点前二まわり候事、

紹鷗袋棚

一、初座は天井に炭斗、香合・羽箒ハ炭斗に入、組置也、由緒有ならハ如图見合・羽かさりてよし、炭斗おろしかた、利休袋棚二同し、後ハ中棚に茶入一ツ置、点様は茶盃持出し、茶入を置合セ、棚の真中より少し客付の方によりてよし、建水持出、右手にて(40オ)左の袋のつまみを持て袋戸をひらき、左手にて蓋置を前二出し、左手二ひさくを取、右手あしらい、左手にしかと持、右手にて戸をメ、蓋置取、点前二廻り、



物も、しを塗、前の戸白の烏子能、縁紹純子(縁)にてとり申候、水さしハよほと平めなるを用る也、濃茶の時、茶巾ハ図之通りニ水指の上通り我の方二よせて置也、

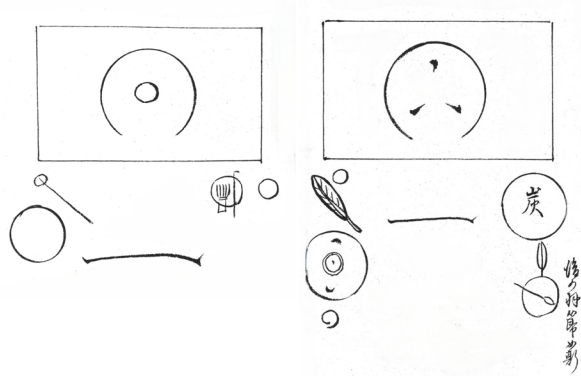
【茶入 此内ニ水／さし／ふたなし】(40ウ)

一、水さしの戸ひらきし時は、茶を点出し、中仕舞して、帛戻り、帛取、こし下ケ、ひさく・蓋置を取、点前に廻る、蓋置を置、釜の蓋を置、ひさくを釜にかけ、右手にて戸をひらき、両手にて水さしをか、へ出す水のくめ、出す

一、茶巾ハ水さしの上通りの中棚に置也、仕終置てよし、水さしの蓋メ候時は、釜に水をさし、蓋をして、ひさく蓋置にかけ、両手にて水さしを奥へ入、右手にて戸をメ候也、其外かわる事なし、

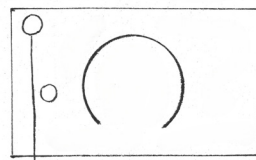
風炉長板の事、一ツ置の事

一、茶入に茶盃置合候事ハ、前断に同し、  
 一、ひさく・蓋置置合有之ハ、右手にて蓋置をおろし、「(41オ)我前に置、左手にてひさくの出たる所を下よりすくひ上ケ候様にして取、右手<sup>二面</sup>あしらい、左手にしかと持、蓋置其水指と長板の間に置、柄杓を右手に取、蓋置<sup>三懸</sup>ケ候事、仕舞ハ水指の蓋をして、



【炭 後の羽箒如斯】「(41ウ)」

ひさくを右手にて取、左手に持、蓋置を取、我前に置、ひさくの左手の上の方を右手<sup>二</sup>持、左手を下におろして持、そのま、長板のはし、図の所に置、蓋置を右手<sup>二</sup>取、「(42オ)取、図の所<sup>三</sup>置合セ候、  
 一、長板一ツ置ハ炭手前むつかし、筆記しかたし、口伝、  
 一、寸長の長板ハ飾付如斯、



如此風呂と長板のはしとの間に置合不申、してハ見苦しくゆへ如斯、「(42ウ)」